

昭 20		年		略		略		略		略	
月		日		略		略		略		略	
7		7		略		略		略		略	
10		30		略		略		略		略	
8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8
25	24	20	16	15	13	12	11	9			
<p>軍令陸甲第一〇六号により編成下令</p> <p>吉林省、敦化地区において、在滿各部隊よりの転入者を基幹とし、現地応召者を主体として編成完結、同日より同地付近の警備</p> <p>敦化地区付近の防衛</p> <p>移駐の命により、敦化出發、各大隊は任地に向かう。</p> <p>第一大隊は、敦化县威虎嶺に到着、同地付近の防衛</p> <p>第二、第三大隊は敦化县黄松甸に到着、同地付近の防衛</p> <p>停戦により各大隊は、各駐とん地を出發、敦化县蛟河に向かう。</p> <p>各大隊は、蛟河に到着</p> <p>蛟河において、約五〇〇名（滿洲電々、滿鉄出身者）現地召集解除</p> <p>蛟河において部隊総員の約八〇パーセント現地召集解除</p> <p>現地召集解除以外の者は、同地において武装解除</p>											
										摘要	

歩兵第三八〇連隊略歴

通称号 不屈第三七三〇二部隊

1914

至自至自									
11	10	10	9	9	11	10	10	8	8
20	25	14	10	9	8	21	14	81	26
<p>現地召解者群（下士官、兵）は、奉天、吉林、新京方面に行動。以後南下し、 帰国した者および途中「ソ」軍に収容され入「ソ」した者等行動状況は区々で あつた。</p> <p>沙河沿飛行場に集結 将校は、将校大隊として沙河沿出発、牡丹江省掖河に移動 掖河着 掖河発、列車により入「ソ」</p> <p>下士官、兵は、教化において第二五六作業大隊等に編入以後掖河において第 二五〇、第二五五大隊等に改編 掖河出発 綏芬河經由入「ソ」</p> <p>連隊長 大佐 大沢 侃次郎</p>									

1915

昭 20		年		略 歴		通称号 不屈第三七三〇三部隊	歩兵第三八一連隊略歴	
8	8	7	7	略	歴			
20	15	14	9	30	10	日		
<p>武装解除後、現地召集解除者および離隊者が若干あつた。</p> <p>敦化飛行場において武装解除</p> <p>第三大隊は、秋梨溝において残務整理後、敦化の部隊主力に合流</p> <p>力（第一、第二各大隊等）を敦化に集結したが、交戦することなく停戦</p>		<p>第三大隊は秋梨溝に残留し、同地付近の警備</p> <p>間島方面より越境した「ソ」軍を鏡泊湖付近において撃滅する目的で、部隊主</p>		<p>同日より秋梨溝付近の警備</p> <p>日「ソ」開戦</p> <p>第一、第二大隊は、陣地構築のため、鏡泊湖西北付近に出動し、同地において</p> <p>陣地の配備についた。</p>		<p>軍令陸甲第一〇六号により編成下令</p> <p>吉林省敦化县秋梨溝において在満各部隊からの転入者を基幹とし、現地召集者</p> <p>を主体として編成完結</p>		摘要

1916

	9	9	8	11	9
	21	1	23	3	3
<p>同地において将校と下士官以下に区分され、以後次のとおり行功した。</p> <p>将校群は、将校大隊に編入後、牡丹江省掖河に移動</p> <p>掖河出發、綏芬河經由入「ソ」</p> <p>下士官、兵は、敦化第二三七作業大隊等に編入</p> <p>敦化出發</p> <p>滿洲里經由入「ソ」</p> <p>連隊長</p> <p>大佐 片山敬吉</p>					

1917

							昭 和 20	年
10	9	8	8	8	8	7	7	月
20	2	21	20	15	9	30	10	日
<p>軍令陸甲第一〇六号により編成下令</p> <p>吉林省敦化県大石頭において在滿各部隊よりの転入者を基幹とし、現地召集者を主体として編成完結</p> <p>爾後大石頭地区の陣地構築</p> <p>日「ソ」開戦</p> <p>部隊総員（第一、第二、第三各大隊）は「ハルハ」嶺南溝地区に陣地構築のため、同地に向かい行動中停戦</p> <p>敦化に集結後、同地において武装解除</p> <p>武装解除後、主として朝鮮在籍者を現地召集解除</p> <p>離隊者若干</p> <p>敦化飛行場に集結後、将校と下士官以下に区分され、以後次のとおり行動した。</p> <p>将校は、将校大隊として沙河沿に至る。</p> <p>牡丹江省、掖河着</p>							略	略
							略	略
							摘	要

歩兵第三八二連隊略歴

通称号 不屈第三七三〇四部隊

1918

	10	9	8	11
	11	1	22	8
	<p>掖河出發、綏芬河經由、入「ソ」</p> <p>下士官、兵は、敦化第二三八作業大隊に編入 敦化出發</p> <p>滿洲里經由、入「ソ」</p> <p>連隊長</p> <p>大佐 遠藤 三郎</p>			

1919

昭和20年										第一三九師団挺進大隊略歴	
年月日											
8	8	8	8	8	8	8	8	7	7		
25	23	21	20	15	12		11	9	30	10	<p>通称号 城第一三〇八三部隊 不屈第三七三〇六部隊</p>
<p>軍令陸甲第一〇六号により編成下令 三江省、佳木斯において第七九、第一一二、第一二二、第一二四各師団等の隷下部隊各兵科の要員を主体として編成完結 日「ソ」開戦 「ソ」軍の進入により、敦化の師団主力に合流のため、佳木斯出發 牡丹江に向かう途中、空爆を受け、列車の運行不能となり反転し、綏化に向かう目的で佳木斯に引き返す。 佳木斯出發、途中降雨多量のため列車の運行遅延 北安省、綏化着、停戦命令を受け、哈爾濱に移動 哈爾濱において武装解除 哈爾濱出發、浜江省阿城に向かう。 阿城より列車により、牡丹江省横道河子に向かう。 横道河子到着、海林に移動</p>											
										摘要	

1920

	11	10	9	9	9
	7	5	22	2	1
	<p>海林着、同地において将校と下士官以下に区分され、以後次のとおり行動した。</p> <p>下士官以下は、海林において第一四二作業大隊に編入後、拉古において第二二作 作業大隊に改編された</p> <p>同地出発、綏芬河經由、入「ソ」</p> <p>将校は海林において将校大隊に編入後、牡丹江省掖河に移動</p> <p>掖河出発、綏芬河經由、入「ソ」</p> <p>隊長</p> <p>大尉 林 重 武</p>				

1921

昭 20		年	
10	8	7	7
10	30	26	20
15	12	9	80
10	10	10	10
野砲兵第一三九連隊略歴 通称号 不屈第三七三〇七部隊			
略 歴			
<p>軍令陸甲第一〇六号により編成下令 吉林省、敦化において野砲兵第一二四連隊要員等を基幹とし、現地召集者を主体として編成完結 敦化付近の警備に任じ、日「ソ」開戦に至る。 「ソ」軍侵入の報により、火炮、弾薬の一部を受領し、対戦準備を実施。 部隊総員（第一、第二、第三各大隊等）は、鏡泊湖陣地に向かい出動 行動途中、停戦を知り、敦化方面に移動 敦化において武装解除、以後離隊者が若干あつた。 主力は、同地の飛行場に移動後、将校と下士官以下に区分され、次のとおり行動した。 下士官、兵は、敦化第二四一作業大隊等に編入 同地出發</p>			
摘 要			

1922

	11	10	9	11
	3	21	2	12
	少佐 田久保若松 連隊長			満洲里經由入「ソ」 将校は将校大隊として敦化第二飛行場に收容された。 牡丹江省、掖河（收容所）に移動 掖河出發、綏芬河經由入「ソ」

1923

							昭 20		年 月 日	工兵第一三九連隊略歴 通称号 不屈第三七三〇八部隊
							7	7		
8	8	8	8	8	8	7	7			
23	22	19	17	15	9	30	10	日	略 歴	
<p>軍令陸甲第一〇六号により編成下令 吉林省、敦化において第一二師団、第一二二師団工兵隊より転入者を基幹とし、現地召集者を主体として編成完結 以後、現地召集者の応急教育を実施するとともに、八月中旬以降実施予定の築城工事の準備 日「ソ」開戦 敦化、閩烏省安図間道路の補修作業のため、安図に向かい出発 吉林省大蒲柴河口において停戦 敦化に集結 敦化において武装解除 現地召集者の一部が離隊した。 敦化飛行場において、将校と下士官以下に区分され、以後次のとおり行動した。</p>										
									摘要	

1924

			11	10	9	10 10 9
			8			8 7 1
						下士官、兵は、同地において第242作業大隊に編入 敦化出發
						滿洲押經由入「ソ」
						將校は、沙河沿において將校大隊に編入
						沙河沿出發、牡丹江省掖河に移動
						掖河出發、綏芬河經由、入「ソ」
						連隊長
						少佐 横 沢 鉄 郎

1925

								昭 20	
								年	
								月	
								日	
10	9	8	8	8	8	8	7	7	
7	1	25	22	20	18	15	9	30	10
<p>第一三九師団通信隊略歴</p> <p>通称号 不屈第三七三一六部隊</p> <p>略 歴</p> <p>軍令陸甲第一〇六号により編成下令</p> <p>吉林省敦化において、第二軍、第五軍等の隷下部隊からの転入者を基幹とし、 現地召集者をもつて編成完結</p> <p>日「ソ」開戦となり、出動準備</p> <p>鏡泊湖付近に出動中、停戦</p> <p>敦化に集結</p> <p>敦化において武装解除、現地召集解除者、約五〇名当時、流言により離隊者統 出</p> <p>沙河沿に移動、同地の飛行場において、将校と下士官以下に区分され、以後次 のとおり行動した。</p> <p>下士官、兵は同地において第二四二作業大隊に編入</p> <p>同地出発</p>									
								摘 要	

1926

				昭
				20
	11	10	9	10
	8	12	2	8
<p>満洲里經由入「ソ」</p> <p>将校は、将校大隊に編入</p> <p>沙河沿より牡丹江省、掖河に至る</p> <p>掖河出発、綏芬河經由、入「ソ」</p> <p>隊長</p> <p>中尉 尾上 久</p>				

1927

										昭	年
										20	
										7	7
										月	
										10	10
										日	
9	8	8	8	8	8	8	7	7			<p>輜重兵第一三九連隊略歴</p> <p>通称号 不屈第三七三〇九部隊</p>
1	20	19	18	11	9	80	10				
<p>軍令陸甲第一〇六号により編成下令</p> <p>吉林省、敦化において在満部隊よりの転入者を基幹とし、現地召集者を主体として編成完結</p> <p>以後、装備の充実ならびに車輛の整備、これにともなう訓練を実施中、日「ソ」開戦に至る。</p> <p>部隊の一部をもつて、満軍反乱鎮圧のため、鏡泊湖方面に出動</p> <p>部隊の主力は、弾薬ならびに糧秣輸送のため鏡泊湖方面に出動</p> <p>主力は停戦後、敦化に帰着</p> <p>一部は、停戦後、敦化の主力に合流</p> <p>敦化（飛行場）において武装解除</p> <p>沙河沿に移動、同地において将校と下士官以下に区分され、以後、次のとおり行動した。</p>										略	歴
										摘要	

1928

	11	10	9	11	10	9
	8	12	2	8	13	24
<p>少佐 佐久間 鉄治 郎</p> <p>連隊長</p>	<p>掖河出發、綏芬河經由入「ソ」</p>	<p>沙河沿より掖河に移助</p>	<p>將校は、沙河沿において將校大隊に編入</p>	<p>綏芬河經由入「ソ」</p>	<p>行軍により沙河沿出發、牡丹江省掖河に移助</p>	<p>下士官以下は、同地において第二四九作業大隊に編入</p>

1929

昭		年		至自	
日	月	日	月	日	月
10	7	8	8	10	7
30	10	23	9	10	8
略 歴					
<p>軍令陸甲第一〇六号により編成下令 吉林省、敦化において他部隊よりの転入者を基幹とし、現地召集者をもって編成完結 同地において出動準備中、日「ソ」開戦となる。 敦化県官地および鏡泊湖付近の部隊に兵器の補給業務を実施中、停戦 敦化において武装解除 武装解除後、満鉄社員等を現地召集解除 部隊の主力は、敦化第二四二大隊等に編入 同地出発 満洲里經由入「ソ」 隊長 大尉 加藤善之助</p>					
摘要					

第一三九師団兵器勤務隊略歴
 通称号 不屈第三七三一〇部隊

1930

							昭 20	年
							7	月
							10	日
		8	8	8	8	8	7	
		20	16	15	13	9	1	10
<p>第一三九師団病馬廠略歴</p> <p>通称号 不屈第三七三一四部隊</p>								略
<p>軍令陸甲第一〇六号により編成下令</p> <p>吉林省、敦化において第一二二師団隷下部隊よりの要員を基幹とし、現地召集者を主体として編成完結</p> <p>日「ソ」開戦敦化付近（北方四キロメートル、朝鮮人小学校）において待機</p> <p>敦化飛行場付近に移動開始</p> <p>師団司令部よりの指示により、前記の朝鮮人小学校に集結</p> <p>敦化飛行場において、大部の人員が離隊した。</p> <p>敦化において武装解除</p> <p>武装解除後、敦化在住者は、同地の各種工場の原職に復帰。その他の現地召集者は奉天、吉林等に至り、以後入「ソ」または帰国している。</p> <p>将校は、第一方面軍隷下部隊とともに沙河沿に集結、同地において将校大隊に編入</p>								歴
								摘要

1931

11

8

沙河沿発、牡丹江省掖河に移動
牡丹江省、掖河出發、綏芬河經由、入「ソ」
廠長

獸中尉 齊藤 幸治

1932

		昭 20	年 月 日	略 歴	関東軍第三特別警備隊司令部略歴（その一） 通称号 鋭第三七四〇四部隊		
8	8	8				7	
14	13	11				9	10
寧安付近において空爆を受け、戦傷者を出した。		敦化に移駐のため、牡丹江出発。	市の一部は空爆を受け、主力は牡丹江市内聖林小学校に移駐。	行 李 班 警 備 小 隊 ……一	獸 医 部 軍 医 部 兵 器 部 經 理 部 參 謀 部 副 官 部	編成 牡丹江において、第一〇三警備司令部を主体として編成中日ノ開戦となる。	軍令陸甲第一〇六号により編成下令。
					摘要		

1933

	10	10	9	8	8	8
	25	12	2	19	17	15
司令官 大佐 今井 龜次郎	<p>北湖頭において停戦。 敦化に到着。 同地において武装解除。 下士官、兵は沙河沿において第二五五作業大隊に編入。満洲里經由入「ソ」。 将校は、敦化県立病院に禁足収容された後ウオロシロク刑務所に入所。 タイセツト地区第一収容所に入所。</p>					

1934

至 自		昭	年 月 日	略 歴	摘 要
		20			
10	10	8	7	<p>通称号 鋭第三七四〇四部隊</p> <p>関東軍第二特別警備隊第一大隊略歴(その二)</p> <p>軍令陸甲第一〇六号により編成下令。 敦化において第六〇兵站警備隊を主体として編成中、日ソ開戦となる。 編成</p> <p>大隊本部 保安中隊・・・二 遊撃中隊・・・一 通信小隊・・・一 輸送小隊・・・一</p> <p>戦闘をすることなく、敦化付近の警備。 同地において武装を解除。 下士官、兵の主力は同地の第二五作業大隊に編入。満洲里經由入「ソ」。 将校は、敦化県立病院に監禁せられた後ウオロシロフ刑務所に入所。 タイセット地区第一分所に入所。</p> <p>大隊長 少佐 寿村通夫</p>	
25	12	9	10		

1935

至自		昭	年 月 日	関東軍第二特別警備隊第二大隊略歴（その三） 通称号 鋭三七四〇四部隊
		20		
8 8 8 8	8 7			
30 17 16 9	9 10		略	軍令陸甲第一〇六号により編成下令。 間島省において第八〇兵站警備隊（二中队）を主体に、憲兵・特務機関を加えて編成中編成未完了のまま、日ソ開戦となった。 編成
部隊主力は、間島付近の警備。 同地において武装を解除。 間島において第三三作業大隊に編入。		大 隊 本 部 保 安 中 隊・・・二 行 李 班・・・一 遊 撃 中 隊 通 信 中 隊 輸 送 小 隊 } 未 完 結		
				摘要

1936

	10	9
	25	3
<p>大隊長 少佐 喜岡安直</p>	<p>同地出発、クシスキー（作業大隊改編後）經由入「ソ」。</p> <p>コムソモリスク地区収容所に入所。</p>	

1937

至自		昭	年 月 日	略 歴	概要		
9	8	8				7	<p>通称号 鋭第三七四〇四部隊</p> <p>関東軍第二特別警備隊第三大隊略歴（その四）</p>
1	18	15				10	
		8	8				
<p>編成</p> <p>大隊本部 保安中隊・・・二 遊撃中隊・・・一 情報中隊・・・一 通信小隊・・・一 輸送小隊・・・一</p> <p>牡丹江周辺および海林に、中隊ごとに配備。 以降、各中隊ごとに横道河子方面に行動し、海林付近（空襲を受けた）、横道河子付近（砲撃を受けた）各地で損害をいだし、分散行動となった。 部隊主力は、横道河子において武装を解除し、その後拉古に移動した。 拉古において第五作業大隊を編成した。</p>							

1938

		10	9 9
			24 10
	<p>部隊長</p> <p>大佐 原田 邦一</p>	<p>拉古出発、グロデゴト經由入「ソ」。</p> <p>セミヨノフカ地区の収容所に入所。</p> <p>スイソエフカ収容所から牡丹江（病院）に、患者約五〇名の逆送者があつた。</p>	

1939

昭和		年	月	日	略	歴	摘要
20	7						
9	8	8	8	8	8	8	8
3	31	29	24	16	10	9	10
<p>軍令陸甲第一〇六号により編成下令。 東安において第八〇兵站警備隊（二中隊）を主体とし、憲兵・特務機関各要員を加えて編成中日ノ開戦となつた。</p> <p>編成</p> <p>大隊本部</p> <p>情報中隊・・・二</p> <p>部隊は数行動群に分かれて、牡丹江方面に向かい行動中情況により予定を変更して横道河子方面に向かつた。</p> <p>一部は横道河子において武装を解除。</p> <p>主力は、横道河子付近において分散行動となつた。</p> <p>冷山付近においてさらに分散。</p> <p>主力は、第二ロマノフカ村（横道河子の西南方）において武装を解除。</p> <p>海林において作業第一四二大隊に編入。</p>							

関東軍第二特別警備隊第四大隊略歴（その五）

通称号 鋭第三七四〇四部隊

略

歴

摘要

1940

225の5

		10 9
		29 15
	大隊長 中佐 市来正明	海林出発、綏芬河經由入ソ。 ライチハ地区一分所に入所。

1941

至自		昭	年 月 日	略 歴	摘要		
8	8	8				7	軍令陸甲第一〇六号により編成下令。 佳木斯において第八〇兵站警備隊（二ケ中隊、一ケ小隊）を主体とし、憲兵・特務機関等の要員を加えて編成中、未完結のまま日ソ開戦となつた。 編成 大隊本部 歩兵中隊・・・一 歩兵小隊・・・一 佳木斯から数行動群に分れて、松花江に沿つて南下し、依蘭方面に向かい行動した。 部隊の主力は、船により松花江を南下し、方正着。 方正において武装解除後、佳木斯に移動。 佳木斯において橋本作業大隊（長、大尉 橋本卯作）および北村作業大隊（長、大尉 北村実治）に編入。
25	21	16				9	

関東軍第二特別警備隊第五大隊略歴（その六）

通称号 鋭第三七四〇四部隊

1942

	10	9
	1	7
<p>大隊長 中佐 河西太郎</p>	<p>ハバロスク地区収容所に入所。</p>	<p>松花江を船で下り入ソ。</p>

1943

昭 18		至自		昭 17		年月日	独立工兵第一二連隊略歴		
1	12	12	12	12	10 9			8	7
13	30	24	22	17	1 15			25	23
<p>「ニューブリテン」島「ラバウル」上陸、同日オ六飛行師団長の指揮下に</p> <p>宇品港出帆</p> <p>宇品港上陸</p> <p>釜山出帆、同日オ八方面軍司令官の隷下に入る</p> <p>同日鮮満国境通過</p> <p>牡丹江省東寧県東寧において、工兵オ一八連隊の転属者を基幹として編成</p> <p>間島省汪清県豊燒に移駐、爾後同地付近の警備</p> <p>牡丹江省東寧県東寧において、工兵オ一八連隊の転属者を基幹として編成</p> <p>完結</p> <p>同日鮮満国境通過</p> <p>釜山出帆、同日オ八方面軍司令官の隷下に入る</p> <p>宇品港出帆</p> <p>宇品港上陸</p> <p>「ニューブリテン」島「ラバウル」上陸、同日オ六飛行師団長の指揮下に</p>									
概要							摘要		

通称号
満オ九二二部隊
銳オ一三〇〇〇部隊

独立工兵第一二連隊略歴

至自	至自	至自	至自	至自	至自	至自
11 11 11	10 6	6 4	3 3	3 3	2 1	
29 25 1	31 18	17 28	14 9	1 1	16 16	
<p>「ウエワク」出発</p> <p>オ三次「ニューギニア」戦における「ウエワク」付近交通作業</p> <p>し、オ四航空軍司令官の指揮下に入る。</p> <p>その間八月十日、剛方作命甲オ四一三号によりオ六飛行師団長の指揮を脱</p> <p>オ四航空情報隊の展開に協力。</p> <p>オ二次「ニューギニア」戦における「ウエワク」付近の交通作業ならびに</p> <p>業</p> <p>「ウエワク」においてオ一次「ニューギニア」戦における東飛行場設定作</p> <p>ニユーギニア島「ウエワク」上陸</p> <p>「ラバウル」出港</p> <p>六飛行師団作命甲オ一二一号により「ニューギニア」方面前進</p> <p>業</p> <p>「ニューブリテン」島「コツボ」において「ラバウル」南飛行場設定作</p> <p>入る。</p>						

1945

											昭 19	
11	11	9	8	2	2	2	2	1	1	1	12	
22	20	30	28	24	23	20	18	15	12	9	4	
牡丹江省穆稜県伊林(興源鎮)着、以後寧安県横道河子に移駐まで同地に	鞍山出發	奉天省遼陽県鞍山着	綏綏作命甲才四六九号に依り演習参加のため海林出發	牡丹江省寧安県海林着、兵力を増員し同地付近の整備	鮮満国境(図們)通過	釜山港上陸	宇品港出帆	宇品港上陸	三三六名死亡	内地に向け帰還の途中、台湾沖において、魚雷攻撃をうけ、乗船沈没し	筑波作命才三八五号により「パラオ」出港	南洋群島「パラオ」島上陸

1946

							昭 20
9	9	8	8		5	5	3
9	6	18	9		10	4	1
<p>編成内容</p> <p>横道河子……本部 中隊四、器材中隊一</p> <p>伊 林……本部 中隊三、器材、車輛小隊各一</p> <p>日「ソ」開戦にともない連隊主力は陣地の強化および付近の橋梁爆破、対戦車攻撃に任じていたが戦闘することなく停戦となる。</p> <p>横道河子において武装解除したが、一中隊のみは大部分が離隊した。</p> <p>離隊者の大部は北鮮をめざして鏡泊湖付近に至り「ソ」軍に捕えられ入「ソ」した。</p> <p>主力は拉古才一六作業大隊に編入</p> <p>同地出発</p>							

1947

			至自		
11	11	11	9	8	9
21	19	上	下10	9	11
<p>綏芬河經由入「ソ」</p> <p>その他才四中隊関係は、拉古才二二作業大隊に編入、九月二十二日綏芬河經由入「ソ」</p> <p>伊林残留隊</p> <p>才五軍司令官の命令により伊林出發（一部少数の残留者は後に横道河子の連隊主力に合流）</p> <p>穆稜県小豆山陣地において才一二四師団工兵隊長の指揮に入り、同師団工兵隊とともに同陣地の構築中「ソ」軍の攻撃をうけ、才一線歩兵とともに戦闘を交え、多大の損害を受け、陣地を後退后部隊は四散し、少数の行動群に別れて横道河子、寧安、蘭崗、東京城、鹿道、天橋嶺等において武装解除を受け、少数の一部は北鮮方面まで南下した。</p> <p>主力は蘭崗金口大隊に編入</p> <p>同地出發</p> <p>綏芬河經由入「ソ」</p>					

1948

226〇6

	隊長
	大佐
	南部
	薫

1949

昭	昭	昭	年
20	19	17	
7 7	9	10 9	月
25 10		7	日
<p>編成改正完結</p> <p>軍令陸甲第一〇六号により編成改正下令。</p> <p>除き全滿の電信部隊に編入</p> <p>教育隊解散（練成隊は昭和二十年七月解散）被教育要員は一部の当隊編入者を</p>			<p>通信第一七連隊略歴</p> <p>通称号 鋭第七五八九部隊</p>
<p>材料廠 一</p> <p>無線中隊 二</p> <p>有線中隊 二</p> <p>本部</p> <p>編成内容</p> <p>教育隊</p> <p>中隊 有線 三</p> <p>無線 二</p> <p>練成隊</p>			
<p>軍令陸甲第七四号により編成下令</p> <p>牡丹江省牡丹江において電信第六連隊を基幹に、現地応召者をもつて編成完結</p> <p>同地において通信線の撤収、通信材料の収集、整備等の作成に従事</p> <p>教育隊を併設。在滿電信隊の初年兵の基本教育を実施</p>			略
			歴
			摘要

1950

至	自	
8	8	8
14	10	9
<p>本部 有線中隊 三 (第一、第二、第四各中隊) (第三中隊欠) 無線中隊 一 材料廠 一</p> <p>日「ソ」開戦とともに、第一方面軍司令官の直轄となり、方面軍通信隊長の指揮に 兼入り、牡丹江において隷下軍師団との通信連絡に従事 連隊本部、材料廠、無線中隊主力の行動 第一方面軍司令部の吉林省敦化移動にともない逐次牡丹江を出発、敦化に移動各方 面との通信連絡</p> <p>第一中隊の行動</p> <p>日「ソ」開戦直前、牡丹江省東寧方面の通信線撤収作業に出発、開戦とともに牡丹 江に帰隊、さらに牡丹江省寧安県鏡泊湖畔の通信線確保のため、寧安県東京城を經 て寧安県南湖頭に移動、通信線を確保</p> <p>第二中隊の行動</p> <p>間島省明月溝——太興溝間の通信線構築のため牡丹江を出発、主力は大興溝方面よ り他は明月溝方面より構築中停戦</p>		

1951

至自									
11	11	10	10	10	8	8	8	8	
15	6	8	5	下	80	20	17	15	
<p style="text-align: center;">第四中隊の行動</p> <p>連隊本部の敦化移動にともない、敦化(寧安)——牡丹江間(鏡泊湖北側)の通信線確保のため、牡丹江を出発、途中、寧安において反乱満軍の攻撃を受け、寧安県沙蘭鎮付近(阿爾站)に至り停戦</p> <p style="text-align: center;">無線中隊の行動</p> <p>間島の第三軍司令部、汪清縣羅子溝の第一二八師団司令部に、各一箇分隊を派遣、主力は牡丹江にあつて第一方面軍司令部との通信に従事。</p> <p>連隊本部敦化移駐にともない主力は敦化に移動</p> <p>停戦となり、各中隊は一部分離者をのぞき各地より敦化に向かい本隊に合流敦化において武装解除</p> <p>将校は敦化将校大隊に編入</p> <p>入「ソ」 「ラーダ」地区に収容</p> <p>下士官、兵の主力は敦化第二五二作業大隊に編入</p> <p>同地出発</p> <p>綏芬河經由入「ソ」</p> <p>その他一部は九月二十七日敦化第二六〇作業大隊に編入</p> <p>同地出発</p>									

1952

	11
	18
	綏芬河經由入「ソ」 連隊長 初代 大佐 松原 作治 二代 少佐 西尾 楨

1953

至自		昭 20	年
8	8 8 8	8	7
28	19 1911	9	10
<p>官地において武装解除</p> <p>南湖頭において停戦を知り、敦化県官地に移動</p> <p>石頭——東京城——鏡泊湖間において軍事物資の輸送</p> <p>大隊本部、第三中隊、修理小隊</p> <p>の軍事物資の輸送、ならびに第一戦地区え兵器、弾薬の輸送に任じた。</p> <p>日ソ開戦後、大隊の主力は、東京城に移駐し、東京城——鏡泊湖（南湖頭）間の軍事物資の輸送、ならびに第一戦地区え兵器、弾薬の輸送に任じた。</p> <p>修理小隊……………一</p> <p>自動車中隊……………三</p> <p>大隊本部</p> <p>編成</p> <p>を主体（基幹要員は、戦車隊出身の下士官等）として編成完結</p> <p>軍令陸甲第一〇六号により編成下令</p> <p>牡丹江市において現地召集者（東安、佳木斯、林口、勃利各地区等の在住者）</p>		略	歴
			摘要

独立自動車第一一四大隊略歴

通称号 鋭第一四一八部隊
鋭第一三〇八一部隊

1954

至自							
	8	8	8	8	8	8 8	9 8
	31	22	20	12	12	11 9	9 31
	<p>敦化飛行場に集結</p> <p>敦化第二三五大隊に編入、哈爾濱—滿洲里經由、入「ソ」</p> <p>第一中隊</p> <p>仙洞、穆稜地区の部隊に対し、通信器材の輸送</p> <p>東京城の大隊本部に合流し、以後入「ソ」まで同行動</p> <p>第一中隊</p> <p>穆稜県興隆屯地区の野砲兵隊（野砲兵第一一六連隊）等に兵器、弾薬の輸送後、東京城方面に南下</p> <p>鏡泊湖畔において停戦を知り、敦化に移動</p> <p>敦化において武装解除</p> <p>敦化飛行場に集結し、大隊本部に合流、以後入「ソ」まで同行動</p> <p>大隊長</p> <p>大尉 湯 浅 正 己</p>						

1955

			10	10	8	8
			28	8	22	18
			<p>福井少尉群</p> <p>依蘭に上陸、一部を同地に残置し、主力は、開拓団員防衛のため方正に移動</p> <p>方正において武装解除後、佳木斯に移動</p> <p>佳木斯において木村作業大隊（長、大尉木村義己）に編入後入「ソ」</p> <p>「ハバロフスク」地区収容所に入所</p> <p>部隊長</p> <p>大佐 西村 貞正</p>			

1956

昭 17								昭 16	年	架橋材料第二九中隊略歴 通称号 鋭第七一〇二部隊
1	12	11	11	8	8	8	7	7	月	
1	30	30	28	8	4	3	31	21	日	
特臨編一六令第一〇九号の一により編成下令 広島において編成完結 編成 中隊本部 小隊……………三 字品港出港 大連港上陸 大連出発、同日朝東洲界通過 東安省虎林着 移駐のため虎林出発 三江省、鶴立鎮着 同地出発 東安省虎林着									略	歴
									摘	要

1957

昭 19	昭 18																				
2	12	12	11	4	4	4	4	4	3	3	3	3	1	1							
15	4	2	28	19	15	13	6	5	12	7	6	1	10	6							
移駐のため、虎林出發、同日虎林県境通過 部隊の主力は、虎林にあつて国境の警備		山海関通過 中支那安徽省、 新 蚌埠着		部隊の一部は、転地演習（渡河および陣地守備訓練）参加のため、虎林出發		東安省、虎林着		大連出發、同日関東州界通過		大連上陸 同地出發		高雄港着 同地出發		仏領印度支那「カムラワン」湾着、同日、同地出發		同地出發 台湾、高雄港着		大連港出發 関東州界通過、同日大連着		虎林出發	

1958

昭												
20												
9	9	9	8	8	8	8	8	8	8	7	3	2
12	11	10	28	21	18	17	16	9	31	17		
<p>三江省、佳木斯着</p> <p>中支派遣隊佳木斯の原隊復帰</p> <p>第一三四師団長の隷下に入る</p> <p>通河地区等の討伐に参加</p> <p>第一三四師団長の命により、部隊は、依蘭に移動開始</p> <p>部隊の一部は、依蘭県宏克利付近において「ソ」軍と交戦し、損害を出した。</p> <p>依蘭着</p> <p>同地出発、南下</p> <p>方正県方正着</p> <p>同地において武装解除</p> <p>方正より佳木斯に移動</p> <p>佳木斯において杉山作業大隊（長、中尉杉山実夫）に編入</p> <p>佳木斯出発、松花江を船により北上</p> <p>「ソ」領「レーニンスキー」港着、同地に上陸</p> <p>中隊長</p> <p>中尉 杉山実夫</p>												

1959

自昭 昭								昭 年
19 18 17								16 月
4	5	11	11	8	8	8	8	7 7
9	8	24	23	20	18	14	11	19 7 日
<p>部隊の一部は、三江省鶴立県において国境地区の土工作業</p> <p>佳木斯において同地付近の警備</p> <p>三江省佳木斯着、同日より同地付近の警備</p> <p>移駐のため、虎林出発、同日虎林県境通過</p> <p>東安省虎林着、同地付近の警備</p> <p>鮮満国境（図們）通過</p> <p>朝鮮、麗水上陸</p> <p>坂出港出発</p> <p>輸重兵小隊 …………… 三</p> <p>中隊本部</p> <p>編成</p> <p>待臨編一六令第一〇九の二により編成下令</p> <p>善通寺（工兵第五五連隊補充隊）において編成完結</p>								
								略 歴
								摘要

架橋材料第三二中队略歴

通称号 鋭第六四一六部隊

1960

						自昭 20 19	自昭 19 18
9	8	8	8	8	8	5	8 11
10	29	21	18	10	9	4 12 初 下旬	22 23
<p>部隊の一部は、架橋演習参加のため、中支、安徽省蚌埠に派遣され、同地において演習実施</p> <p>部隊の一部は、森林啓開演習参加のため、三江省、伊春に派遣され、同地において演習参加</p> <p>「ち」号演習参加のため、筒井少尉以下二六〇名は、牡丹江省穆稜地区に派遣され、第一工兵隊司令官の指揮下に入り、陣地構築作業に従事（注、207筒井少尉内地転出後、竹形曹長が隊長となった。）</p> <p>派遣隊中、黒瀨軍曹以下一六〇名は、臨時工兵第三大隊長の指揮下に入り、穆稜陣地の構築に従事</p> <p>日「ソ」開戦となり、部隊主力をらびに派遣隊は次のとおり行動した。</p> <p style="text-align: center;">○</p> <p style="text-align: center;">部隊の主力</p> <p>佳木斯出發、水陸兩行動群に別かれ、松花江および同江添いに南下</p> <p>方正県伊漢通において水陸兩隊が合流後、方正に移動</p> <p>方正県方正において武装解除後、佳木斯に移動</p> <p>佳木斯到着、同日、同地編成の松岡作業大隊（長、中尉松岡敏治）に編入</p> <p>佳木斯出發、黒河經由入「ソ」</p>							

1961

8	8	8	9	9	9	8
30	22	12	6	2	1	14
<p>注 方正——佳木斯間の軍馬輸送のため、部隊の一部は、八月二十三日方正 出發、九月三日佳木斯に到着、九月十日同地編成の杉山作業大隊（長、 中尉杉山実夫）に編入 九月十一日出發、松花江を船により入「ソ」 穆稜 派 遣 隊 竹形隊は、穆稜陣地を出發 途中、分散行動となり、牡丹江省横道河子、東京城ならびに間島省延吉等にお いて武装解除。 竹形隊の主力は、牡丹江省鏡泊湖の南湖頭において武装解除。東京城に移動 東京城において秋山作業大隊（長、少佐、秋山輝雄）に編入 同地出發、綏芬河經由、入「ソ」 黒沢隊は、穆稜陣地を撤退後「ソ」軍戦車隊と交戦し戦死傷ならびに生死不明 者を出し、寧安県代馬溝に向かう。 代馬溝を通過後、逐次分散行動となった。 黒沢隊主力は、間島省汪清県天橋嶺において武装解除、間島に移動 間島第一二作業大隊に編入</p>						

9
B.
間島出発、彈春經由、入「ソ」 中隊長 中尉 田 窪 熊一

1963